

図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2014. 3. 12

主な内容	頁
為学故読書(寄稿)	幹事 陸将 岡部 俊哉..... (473)
教官著書の紹介	公共政策学科 河野 仁..... (477)
教官著書の紹介	人間文化学科 野村 玄..... (479)
情報リテラシー教育の実施について	(481)
図書館からのお知らせ	(483)

為学故読書

幹 事

陸将 岡部俊哉

人間にとって最も大切な本質的要素とは何かと申しますと、それは、人間の徳性、習慣であります。これに比べて附属的要素と申すのは、知識・技能であります。この知識・技能と申すものはあればあるにこしたことはありませんが、少々足りなくてもかまいません。知識・技能のすぐれた秀才といわれる人が多くありますが、殆ど例外なしに自分の才を誇示し、冷たく排他的の者が多いものであります。徳性が備わり、よい躰を身につけて初めて知識技能も光彩を放つのであります。

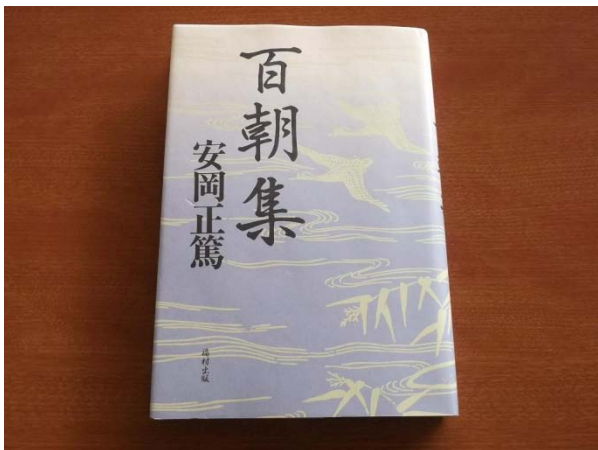
(『青年の大成』安岡正篤著)

20年以上前のことになるが、小倉駐屯地に所

在する第40普通科連隊において中隊長として勤務していたある日、誘われて駐屯地近傍の洋装店にお邪魔した。御自宅を兼ねた店舗であり、一面が古書・書籍で埋め尽くされた広い書齋に通された。初対面の私に対し社長さんは、「自衛隊幹部は勉強していない人が多い。」といきなり言われた。大量の本とその鋭い眼光に圧倒されながら、負けじと陸上自衛隊の教育制度まで持ち出して反論する私に、「自衛隊(職業)に関わる知識・技能に精通することは当たり前で、それを知らなければ国防のプロとは言えない。しかしながら、それは真の勉強ではない。幹部自衛官こそ勉強が必要だ。本当の勉強をなさい。」と言われた。正直言って、

最初は何を言われているかよく分からず、また胡散臭さを感じながらも、一方でその人物に大変な魅力を感じた。その社長さんは、ボランティアとして市井における古典の勉強会等を主催しておられることを知り、それ以来師としてお付き合い頂き、時には部隊にお招きし部外講師として教えを頂戴して、今に至っている。

その最初の訪問の際、頂いた本の一冊に『百朝集』安岡正篤著（福村出版等）があった。



安岡先生が古来の哲人賢者等の名言（「論語」、「菜根譚」、「孫子」、「呻吟語」、「旧約聖書」、「ファウスト」、「川柳」等々、東西の様々な古典が原典）百編を選び、注釈・短評を付けた語録である。とにかく感銘を受けた。心揺さぶる言葉に、自分のこれまでの不勉強を思い知らされた。今でもそうであるが常に鞆に入れて持ち歩き、そしてその一つ一つを噛みしめる内に、それぞれの原典にも興味が湧き、爾来安岡正篤先生の著書とともに特に東洋の古典に接するようになった。遅蒔きで恥ずかしい話しであるが、言わば人生の師とともに、私に読書の広がりを与えてくれた貴重な一冊との出会いであった。

「少にして学べば壮にして為すあり。
 壮にして学べば老いて衰えず。
 老いて学べば死して朽ちず。」

これは一般に「三学戒」と呼ばれ、『百朝集』に収められている一編である。幕末の江戸幕府直轄学問所（昌平黌）の儒官（総長）であった佐藤一齋先生の語録『言志晩録』を原典とする。一齋先

生が四十二歳から八十二歳の約四十年間に書き留めた、全部で千百三十三章から成る語録集『言志四録』（四部作：『言志録』・『言志後録』・『言志晩録』・『言志蓋録』）のうちの一冊である。



この三行の句「三学戒」から、新たに『言志四録』との付き合いが始まった。各々短い章句ではあるが、立志、修養、学道、武士道、教育、健康・養生・飲酒、名利、出处進退、処世、生・死等々、人生の多岐に渡る分野において色々な切り口で説かれた不易の真理がちりばめられている。西郷南洲（隆盛）翁の愛読書でもあり、この中から彼が百一則を抜き出したものは、『南洲手抄言志録』として伝わっている。

『言志四録』の中から紹介したい章句は山ほどあるが、読書と学に関わるものをひとつ。

「学を為す。故に書を読む。」（『言志録』）

本拙文の表題にした短文であるが、これを読んだ時、ある意味、私にとって衝撃が走った句であった。「学をなす、そのために書を読む」。当たり前と言えども当たり前だが、一齋先生は「学≠読書」、すなわち学と読書の関係を目的と目標、目標と手段として明確に論じておられる。この短い文章から、学を為すにあたり、様々な分野の直接的・間接的方法・手段を用いるべき（読書は一手段でしかない）こと、そして読書に対する姿勢までも教えてくれた。

更に、一齋先生の魅力に触れる句をもうひとつ。

「事^{おもんばか}を慮^{しゅうしょう}るは周詳ならんことを欲し、事を処^{いかん}するは易簡ならんことを欲す。」

（『言志録』）

「物事を考える時は周到綿密である事が大切だが、熟慮した上でいざ実行する時には、簡潔に断行する事が大切だ。」ということである。ここで興味深い事は、幕末の大先生で、明治維新の立役者を含め後世に名が残る多くの偉人を教導・感化した佐藤一齋先生が、「欲し・欲す」すなわち「かくありたい」と言っておられる所だ。裏を返せば、「考えに見落としがある、断行出来ず迷う」ことがあると証言^{せきがく}しておられるもので、大きな差こそあれ、この碩学にしてもそうなんだと、何となく安心感を与えてくれる。そして更には、壮年・老年になっても衰えない徳操向上への強い志・努力が観える。佐藤一齋先生の押しつけではない、自らの反省・修養への取り組みが、処々読み取られる事も、『言志四録』の面白さである。

『百朝集』をきっかけとして、『言志四録』のみならず、乱読、読みかじりの域で未だ理解甚だ不十分ながら、『百朝集』記載各句の原典をはじめいくつかの東洋の古典、そして聖賢・偉人と出会う（接する）事が出来た。現在、世の中には様々な形・媒体で情報が溢れている。流行語大賞の様にその年に大いに流行った言葉が、翌年にはもう陳腐化し忘れ去られる。所謂雑学・ノウハウをはじめ、ありとあらゆる情報、流言飛語が発生しては消え、ポッーとしていると、何が必要で何が不必要なのか、何が問題なのか、何時何を決心すればよいのか、分からなくなる。その中で、あまたの時代を超え、思想を超え、消えずに生き残っているものが古典であり、不易あるいは時々の価値観、道徳観、倫理観、常識等を教えてくれる。今起きている事象・問題は過去の歴史の繰り返しでもある。熟読すれば、様々な悩みを抱えて今を生きる我々にも、必ず力と光明を与えてくれる。現在もそうであるが、私自身がこれまで指揮官、幕僚として、その職務について、上司の指導を得られ、同僚・後輩の助けを貰い、まがりなりにも遂行してこられたのは、この『百朝集』、『言志四録』等をはじめとする古典のお陰といっても過言ではないと思う。また、全ての書籍・語録についても言

えることであるが、悩んでいる当時に背中を押す大きな力をくれた言葉が、今見ればさほどの感激がなかったり、逆に読み過ぎしていた句が現在は心に染みたりすることも、一興である。

正直言って、東洋の古典の原文は現代人の我々には読み難く、例えば『四書五経』等をはじめとする様々な古典の素養、時代背景の認識等がなければ、それぞれの文章の深さ、作者の真意の理解が難しいものである。私自身の恥を曝け出す様だが、『論語』については、幾度も挑戦し、勉強会に参加したこともあるが、どうしても途中で挫折してしまう。その他についても、一応読了してはいなくても、真に読破出来て（読めて）いないものばかりである。この浅学・不徳の身でありながら古典との付き合い、そしてその一部を紹介する事が出来るのも解説書のお陰である。古典は、それぞれに様々な解説本が多数出版されており、これらを活用することにより理解が促進され、また新たな発見を体験できる。『言志四録』について、解説本の一部を紹介する。句の選定、区分整理、解釈について、各々の解説者の素養、人生観等を諮ることも出来、これらを読み比べてみるのも、また面白い。

『佐藤一齋の言葉—『言志四録』を生きる』菅原兵治著（黎明書房）

『人間学言志録』越川春樹著（以文社）

『言志録講話』山田準著（明德出版社）

『言志四録 抄録』渡邊五郎三郎訳

（明德出版社）

『人間は一生学ぶことができる（佐藤一齋「言志四録」にみる生き方の智慧）』

谷沢永一・渡部昇一著（PHP）



最後に、雰囲気を変えて『鬼平犯科帳』池波正太郎著（文春文庫）を勧めたい。文庫本で全24巻及び番外編からなる連作の短編に長編を織り交ぜた小説であるが、テレビでも永年に渡り放映されており、名前位は聞いたことがあると思う。火付盗賊改方長官の長谷川平蔵^{のぶため}宣以を主人公として、火付盗賊改の部下（与力・同心）、密偵、盗賊、家族・仲間等が織りなす犯罪・捕り物・人情物語であり、江戸の街・風情巡り、作者の池波正太郎ならではの四季折々の季節感溢れる食べ物の描写も楽しみと言われる。しかしながら、何と云っても鬼平こと長谷川平蔵の人物の魅力に尽きる。若い頃には「本所の鍔」と呼ばれ、無頼の輩と交わり、その親分格となって放蕩三昧をした平蔵が、年月を経て火付盗賊改方長官^{おかしら}となって事件を解決する（鎮める）。ここには、単なる勧善懲悪（「正義と悪」）ではない、鬼平ならではの「清規（法）^{ろうき}と陋規（裏社会のルール）」・「法と情」の対立・バランスの世界がある。極悪犯に対しては猛者たる部下達も驚く様な、まさに鬼と化した冷徹な仕置きをする反面、「①貧しきからは盗まず②殺さず③犯さず」という盗賊としての掟（モラル）を守る、筋が通った？盗人に対しては時には寛大な処分を行い、その人物によっては密偵として配下に置く。加えて先見洞察・沈着冷静な判断・勘ばたらき、剣客、慈愛、信頼、平等、そして密偵のために命を張る。当然のこととして部下の与力・同心はもとより、密偵までも鬼平に心酔し、鬼平のためならば命も惜しまず活躍する。

私は鬼平の人物に接する度、「人の君たる者は下情に通ぜざるべからず。下事には則ち必ずしも通ぜず。」（『言志録』）を思い出す。「人の上に立つ者は、下の者の心情・人情風俗の状況についてよく知っておかねばならないが、下の者の技術的な仕事（細かい仕事の手順等）については、必ずしも通じておく必要はない。」といった意味である。

また、まさに『孫子』の「将とは、智・信・仁・勇・嚴なり。」（計篇第一）、「卒を視ること嬰兒の如し、故にこれと深谿^{しんけい}に赴くべし。卒を視ること愛子の如し、故にこれと俱に死すべし。」（地形篇第十）そのものである。作家池波正太郎の作品とはいえ、鬼平がここまで魅力的に感じ、これに惹かれる訳を考える時、私は儒教思想に限らず東洋の古典に相通じるものを感じる。かつての日本人がそうであった様に、古典の教え・素養が根底にあり、それが言動の端々に滲み出て、結果として古典にみる指導者（君子）像を具現していればこそと思うのである。陸自幹部学校の指揮幕僚課程学生時代に、『鬼平犯科帳』をもとに「鬼平の統率」を、統率論文として真面目に取り上げた先輩（元方面総監：OB）がおられたことにも納得がいく。

蛇足ながら、中村吉右衛門主演のテレビシリーズも良いが、やはり原作の方が断然面白い。但し、番組のエンディング・テーマで流れるジプシー・キングスの『インスピレーション』、これはいける。鬼平の裁きの痛快さ、情の温かさの余韻に浸りながら、最後に映し出される江戸の四季の風情と意外にも見事にマッチしたフラメンコ・ギターの調べに、何とも言えない哀愁と心地よさを感じる。『鬼平犯科帳』の一読に併せ、機会があれば是非視聴して頂きたいものである。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所

百朝集（福村出版等）：

159.8-Y66（地下フロア）

言志四録：Kg-274～277

（「防大生に読んでほしい1冊」コーナー
（4役4部長等紹介図書）

鬼平犯科帳：B-い-4-52～75

（1階文庫コーナー）

~~~~~教官著書の紹介~~~~~

『〈玉砕〉の軍隊、〈生還〉の軍隊』

(講談社学術文庫、2013年)



本書は、2001年に講談社選書メチエとして刊行された著書(絶版)を文庫版として復刻したものです。副題に「日米兵士が見た太平洋戦争」とある通り、主として南太平洋メラネシア地域にあるソロモン諸島(英連邦王国)の首都ホニアラが所在するガダルカナル島で繰り広げられた激戦を生き延びた日米両軍兵士の戦闘経験を比較しています。すでに太平洋戦争の開戦から72年が過ぎ、本書で取り上げた日米両軍の兵士に対するインタビュー調査(米国留学中の1992~94年にかけて実施)の時点からすでに20年という歳月が流れています。

「なぜ兵士は戦うのか」「何が兵士を戦闘へと動機づけるのか」という「戦闘意欲(combat motivation)」の問題は、「戦闘の社会学(Sociology of Combat)」という研究分野における中心的な問題関心です。軍事社会学(Military Sociology)を専門とする私の博士論文のテーマは「第2次世界大戦における戦闘組織の日米比較」でした。本書は、その博士論文

公共政策学科 教授 河野 仁

の中で取り上げた日米両軍兵士の戦闘体験を、「ひとりの人間としての兵士」の視点から考察しようとしたものです。「なぜ日本兵はバンザイ突撃ができたんだ?俺達には到底理解できない。自殺行為だ」というのが、多くの米軍兵士から私に浴びせられた質問でした。「バンザイ突撃(Banzai attack)」「カミカゼ攻撃(Kamikaze attack)」というのは、米軍兵士にとっては、日本という異文化で育った兵士の特異な行動を象徴的に表す名称です。日本兵の「玉砕」や「特攻」は、文化的価値や規範を共有していない米国の兵士には、理解不能な不可解な行動でした。戦後世代に属する私も、実は、米軍兵士と同じような素朴な疑問を抱いていました。元日本兵へのインタビューを重ねてゆくことは、自分自身にとってのナゾ解きを続けることにもなりました。日本とアメリカという、一見、大きく異なった文化的背景を持つ両国の兵士が、どのような意識を持って軍隊に入り、どのような教育訓練を受けて戦場という特殊な環境に適応していくのか、戦闘の現場ではどのような心理状態になるのか、負傷したり殺されるかもしれないという恐怖心や、敵の兵士を殺すことに対する道徳的葛藤をどのように克服したのか、極限状況で指揮官たちはどのように戦況を冷静に見極め、部下を適切に統率することができたのか、戦場への適応に失敗したらどうなるのか、といったさまざまな疑問を、ひとつひとつ元兵士たちにつけてゆくごとに、答らしきものが得られると同時に、また新たな疑問が浮かんでく

る。20年前の調査研究の過程では、そうした試行錯誤の連続だったことを今では懐かしく思い起こしています。

延べ百名に上る日米両軍兵士へのインタビューの中で、もっとも記憶に残っているのは「天皇陛下万歳？そげんバカはおらん」という日本陸軍37師団の元兵士の言葉です。大分県の農家出身だという元上等兵は、ガダルカナル島ではなく中国戦線で戦闘を重ねた経験の持ち主でした。日本兵の多くが「お国のために戦った」「お国のためという言葉の中には天皇陛下のためという意味も含まれる」と語るなかで、「天皇陛下のためじゃない。」「おふくろがおるから、死んでたまるか」という気持ちで戦っていたと明言した珍しいケースでした。「天皇制イデオロギー」が日本兵を戦闘へと動機づける要因だったという、多くの米軍兵士が信じる通説に反する事例に遭遇し、改めて戦闘意欲を構成する要因を再検討する契機になりました。

第2次世界大戦中、米軍は敵性国の国民性を研究するため、社会学者を大量に動員していました。シカゴ大学の社会学者であったエドワード・シルズとモリス・ジャンピッツは、ドイツ軍兵士の士気(morale)に関する研究を行いました。連合軍の捕虜になったドイツ軍兵士に対する尋問の過程で、かれらは当初、「ドイツ軍兵士はナチズムのイデオロギーに動機づけられて戦っている」との仮説を持っていました。しかしながら、捕虜たちへの尋問(インタビュー調査)を重ねるうちに、「最前線では、ナチズムなど関係ない」と証言するドイツ軍兵士の心情を把握するようになり、当初の仮説は不適切だとして、新たに「第1次集団説(primary group theory)」を唱えるに至りました。すなわち、ドイツ軍兵士は、戦場で生死をともにする戦友同士の連帯感、すなわち「家族同然の親密な集団＝第1次集団(primary group)」の絆のゆえに戦うという仮説です。1949年に発表されたこの第1次集団説は、今日でも古典的理論とされています。上記の元日本兵の証言は、この第1次集団説が日本軍の場合にもある程度適応可能なのではないかということを示

唆するものでした。したがって、本書では、この第1次集団説の視点からの考察がひとつのモチーフになっています。

本書には、もうひとつ重要なモチーフがあります。それは、冒頭に述べたように「ひとりの人間としての兵士」の視点からの考察です。社会学における基本的な理論的視座の一つに「社会的構築主義(もしくは社会構成主義 social constructionism)」というものがあります。社会的構築主義の視座では、とくに「兵士は社会的につくられる」という側面に着目します。どのようにひとりの市民が、日本軍あるいは米軍の兵士としてつくりあげられていくのか、という問題意識が本書のライトモチーフになっています。われわれが日本社会の中でひとりの「日本人」となるためには、日本語をはじめ日本の文化規範や価値を学習する「社会化」のプロセスが必要です。他者との相互作用を通して文化規範・価値を学ぶプロセスを「社会過程(social process)」と呼びますが、「兵士」が社会的に作られてゆく場合も同じです。家族や近隣社会、学校教師、友人集団との相互作用、軍に入隊後の教育訓練の過程、戦場における敵との相互作用までもが「ひとりの人間が兵士となってゆく社会過程」に含まれます。本書の構成が、第1章では「軍隊と社会」として、日本と米国社会を「動員社会」「志願社会」と対比してまず両国の社会文化的文脈の相違を描き、第2章で「市民から兵士へ」とひとりの人間が兵士として社会的に作り上げられてゆくプロセスを比較しているのはそのためです。なお、第3章では日本軍兵士、第4章では米軍兵士の戦闘体験を比較し、最後に第5章で「玉砕の軍隊と生還の軍隊」として、日米両軍の兵士の思想と行動を比較考察しています。

本書の「文庫版へのあとがき」で紹介したように、近年、戦争体験のオーラルヒストリー(oral history)を収集・データベース化して「戦争の記憶」を公共財にしようとする動きが日米両国で活発化しています。日本では、太平洋戦争開戦70周年にあわせて、NHKが「戦争証言プロジェクト」を企画し、TV放映後の番組が「戦争証言ア

「一カイクス」としてホームページ上に公開されています。本書に仮名で登場する人物も、「ガダルカナル 繰り返された白兵突撃～北海道・旭川歩兵第 28 連隊～」(2008 年 3 月 26 日放映)という番組において実名で証言していますので、あわせて視聴してみることを勧めます。

直接的な戦闘体験を持つ世代が次第に姿を

消していく中で、本書に登場する日米両軍の元兵士の貴重な戦闘体験から、皆さん自身が自分なりの問題意識を持って「何か」を学びとってもらえれば幸いです。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所
Kg-2188(1階教官著書寄贈コーナー)

～～～～～～～～～教官著書の紹介～～～～～～～～～

『徳川家光—我等は固よりの将軍に候—』

(ミネルヴァ書房、2013 年)



人間文化学科 准教授 野村 玄

する著名人もいる(芳賀徹「いま、ふたたび「徳川の平和」に学ぶ」〈米欧亜回覧の会編『世界の中の日本の役割を考える』慶應義塾大学出版会、2009 年))。つまり、その長期間の政権存続と「平和」状態をもたらした政治的・文化的な仕組みに注目が集まっているのであり、その再評価の機運があるのである。

徳川将軍家による統治が高く評価される一方で、将軍それぞれの顔はほとんど見えないというこのギャップは一体何に起因するのだろうか。

日本近世史専攻の一研究者として考えてみると、その原因の一つには、意外に思われるかもしれないが、実は将軍自体の研究が非常に少ないという学界の現状があるだろう。

従来、当該将軍在職中に推進された諸政策や発生した歴史的事件に注目し、関連史料や状況証拠から将軍の意図を類推する研究手法が採られてきたが、将軍の個性への肉迫はあまりなされてこなかった(できなかった)。それは、将軍自身の手になる史料が限りなく少ないという史料の限界によるところが大きい。だからであろうか、徳川歴代将軍の伝記もまた、長期

周知の通り、江戸幕府の歴代将軍は 15 代を数える。だが、例えば授業の中でその 15 名の将軍全員の名を就任の順番通りに挙げてみるよう学生に促してみても、正確に答えられる人は少ない。誰もが知っている名とともに、ほとんど記憶されていない名もあり、筆者の主観だが、記憶されていない将軍のほうが多いように思われる。

一方で最近、家康による開幕以来、明治維新までを視野に入れ、江戸幕府が 265 年間という長期間存続した事実を重視し、しかもその間、寛永 14 年(1637)の島原の乱や幕末の攘夷運動に伴う馬関戦争や薩英戦争を除けば、外国勢力の関与する戦争がなかったことにも注目し、江戸幕府と徳川将軍家の統治した時代をローマ帝国の平和になぞらえて「徳川の平和」と称

存続政権の歴代指導者としては意外なほどに少ないのである。

確かに「徳川の平和」論は魅力的である。しかし、その時々将軍の政治的意図や苦悩、限界を抜きにした「徳川の平和」論は、半ば結果論的な単なる江戸幕府の礼賛に終わってしまう恐れがある。江戸幕府の政治をめぐる歴史的検討を重厚なものとしていくためには、史料的限界を克服するための工夫を行いながら、江戸幕府の指導者であった徳川歴代将軍の歴史的評価を着実に進めていく必要がある。

だがこれは、言うは易く行うは難しである。このたびお話のあった徳川家光の評伝の執筆についていえば、家光の歴史的評価はいちおう既に藤井譲治『徳川家光』（吉川弘文館、1997年）などの業績によって江戸幕府を確立させた将軍として定まっておらず、それに何か新たな要素を付加することは容易ではなく、また史料的限界の克服もなかなか困難な問題である。しかし、管見の限り、家光の伝記は藤井氏の『徳川家光』以来刊行されておらず、いわば徳川家光でさえ、この16年間伝記はなかったのである。執筆に不安がないわけではなかったが、家光が江戸幕府を確立させたということは、後代の将軍たちにも何らかの影響を与えているだろうと推測されたから、筆者なりに家光という将軍に肉迫し、16年という年数を反映させた評伝を執筆することは、あらためて江戸幕府や徳川歴代将軍とは何であったのかを考えるよい契機になるだろうとも考え、微力を尽くすことにした。

また、出版のタイミングとして、家光の将軍襲職の年（1623年）から390年という節目の年を選ぶことができたこともありがたかった。しかもかなり後になって知ったことだが、2013年は、家光の政敵となった弟徳川忠長の没後380年、家光の乳母春日局の没後370年にもあたり、今回の評伝の執筆には、何か巡り合わせのようなものも感じた。だからだろうか、幸いなことに、徳川宗家をはじめとする子孫の方々や関係機関からも多大なご協力をいただくことが

でき、将軍の評伝執筆に際しての課題であった史料的限界の克服についても現段階で最大限の工夫が可能となった。また本書では、海外史料の積極的活用も意図した。東京大学史料編纂所は『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』訳文編を東京大学出版会から継続刊行しているが、その翻訳を叙述ではかなり参照させていただいた。

様々な国内史料や『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』訳文編の検討は、徳川家光と彼の率いた江戸幕府が当時直面していた政治的課題（家光の健康問題とその隙を突く形での弟忠長の将軍擁立の動きやキリシタンの大量蜂起としての島原の乱、そして祖父家康以来の諸大名への役賦課による国内の疲弊がもたらした寛永の飢饉、次々と来航するポルトガル船の装備との差から、幕府の軍事的対応能力の限界を露呈してしまい、オランダ商館長からは幕府の軍事力の劣化を見抜かれていたことなど）を描き出すことを可能にしたが、家光はそれらの課題に懸命に対処すべく、自らの政治的基盤を人事面から整備しつつ、キリシタンの大規模摘発と遅ればせながらの飢饉対策などに取り組んでいた。それらの取り組みは、後々の幕府の機構や政策の原型となるものだったから、家光は江戸幕府を確立させた将軍として後世に記憶されることになったのだろう。

だが、今回史料から浮かび上がってきた家光の姿は、それらを全て成功させた将軍というよりは、むしろなかなか諸課題を達成できず、しかも自らの健康問題も相まって、長期間継嗣に恵まれなかったことによる将軍家の存続問題に頭を悩ませるという苦しい姿であった。そのような家光は、東照大権現となっていた祖父家康と、当時妹の東福門院（徳川和子、後水尾天皇の中宮）を通じて縁戚関係にあった天皇家への依存を強め、他大名家に対する将軍家の理論的優位を確保することに意を用いていたが、これらは多分に抽象的政策で、現実の諸問題を具体的に解決する方策ではなかったし、また却って天皇家の立場を安定化させて強化すること

につながるものでもあった。本来家光は、オランダ商館長から見抜かれていた幕府の軍事的能力の劣化問題にも真剣に取り組むべきだったが、家光にはその時間と能力は残されておらず、家光の政策は未完のまま数え 11 歳の家綱に引き継がれることになった。

このような本書の内容をふまえると、今後、徳川歴代将軍の営為については、どのような観点から歴史的に評価していくことが妥当だろうか。今のところ筆者は、あの長期政権を実現させた江戸幕府でさえ終焉を迎えたことを重

視するならば、常に幕末を展望しつつ、家光の遺した課題（軍事的能力の劣化問題や、却って安定・強化された天皇の立場の取り扱い）に対する子孫の取り組み方如何がかなり重要な指標となり得るのではないかと考えているが、この点については、もう少し腰を落ち着けて考えてみたいと思っている。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所
289.1-N95(1階教官著書寄贈コーナー)

情報リテラシー教育の実施について

総合情報図書館事務室

今年度から情報リテラシー教育として、1学年全員に図書館情報の効率的・効果的な活用を図るための文献情報検索機能の利用方法について教育した。

教育後に利用状況についてアンケートを実施したところ、授業に必要な資料の収集や論文検索に役立ったなどの回答が約 20%あった。しかし利用する予定がないなどで、役に立たなかったとの回答もあった（約 13%）。

また「どちらでもない」との回答が、約 60%と多かったが、未だ、文献情報検索を必要とする機会がないことが理由と考えられる。

いずれにしても、情報リテラシー教育によって、文献情報検索機能についての理解や周知が十分に行われたものと考えられ、今後の図書館および図書館 HP の利用に繋がるものと期待できる。

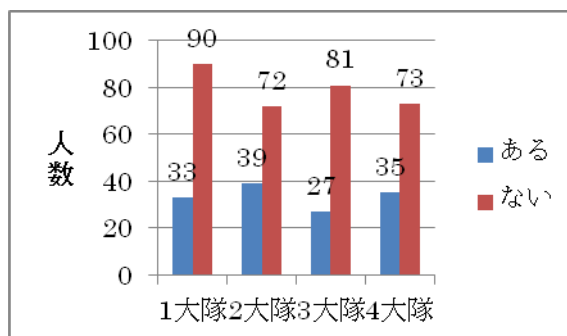
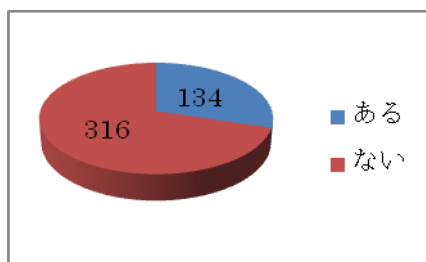
〈参考アンケート結果〉

1. 調査の対象と方法

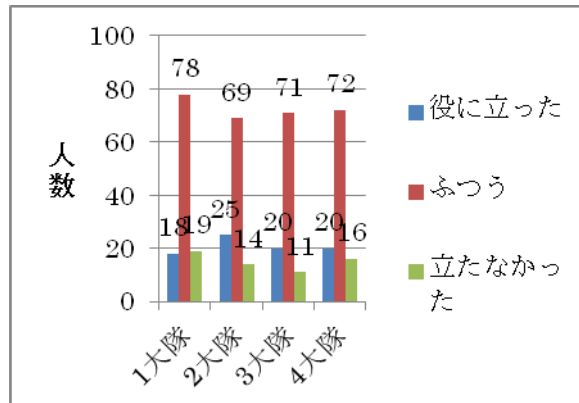
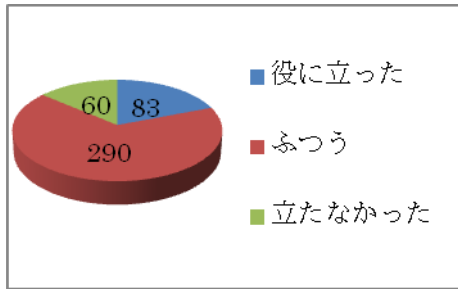
- ・調査対象 1 学年生
回答者数 450 名
- ・調査の方法 質問紙法（アンケート）による一斉調査
- ・実施日 平成 25 年 9 月 12 日（木）

2. アンケート結果

I. I 文献・情報検索について学んだ後、図書館または図書館 HP を利用しましたか？



II 文献・情報検索について学んだことは役に立っていますか？



II-a 役に立ったと答えた人は、どんな時に役に立ったかを教えてください。

- 読みたい本が探しやすい (54)
- 資料集め (23)
- レポートで役に立った
- 基礎ゼミ
- 探しやすかった
- 授業のレポート作成 (6)
- 探していた文献が見つかった (7)
- レファレンス
- このようなシステムがあることが知れた (3)
- 本を授業で使えた
- 幅広い分野の資料が手に入る

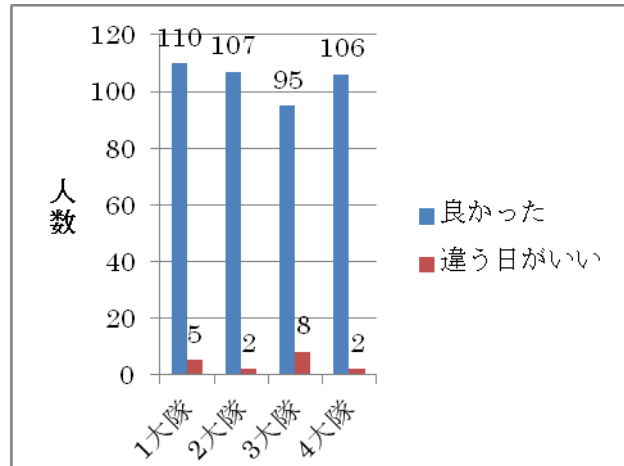
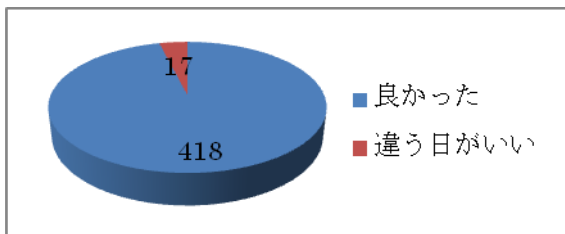
II-b 役に立たなかったと答えた人は、役に立たなかった理由を教えてください。

- 使い方がまだ分からない (8)
- 行く機会がない (40)
- 使う機会がない (4)
- 使っていない (9)

III もっと説明して欲しいと思ったことがありましたか？ある場合には、説明して欲しいと思ったことを教えてください。

- 本の探し方 (5)
- 使い方について説明してほしい

IV 行われた時期について (5月27日から6月20日まで) どうでしたか？



図書館からのお知らせ

① 防大総合情報図書館に残る GHQ 没収図書 (第2弾)

GHQ(連合国軍最高司令部)は、日本の非軍事化政策の一環として、昭和 21 年から 23 年にかけて、戦前・戦中の約 7,000 件の図書を「宣伝用刊行物」として没収対象に指定しました。

これらの没収対象図書のリストは「総目録 GHQ に没収された本」(占領史研究会編)として平成 17 年に単行本として出版されました。当図書館でこのリストに載せられた約 7,000 件について所蔵図書を調査したところ、これまでのところ 356 件の図書が確認できました。これらは戦後の処分を免れた図書として貴重なものです。

今回は平成 23 年の展示でご紹介できなかったもの 28 冊を展示しました。



② 遺墨展示「昭和に活躍した軍人・政治家」

防大総合情報図書館に所蔵する著名人の遺墨のうち、昭和時代に活躍した軍人と政治家 6 名の遺墨を展示しました。

鈴木貫太郎元首相、岸信介元首相、米内光政元首相・海相、畑俊六元帥、山本五十六元帥、山下奉文陸軍大将の 6 名の方の遺墨です。歴史に名を残した方々の直筆の書をご覧ください。



③ 「防大生の、防大生による、防大生のための 1 冊」

総合情報図書館では本年度、「防大生の、防大生による、防大生のための 1 冊」と題して学生から学生に紹介したい本を募集し、学内メールを通じて良いと思うものを学生に投票してもらいました。

その中から以下の上位 5 冊を選び、3月 10 日に表彰を行いました。

順位	推薦者	書名
1	4学年332小隊 浦山 修太郎	海賊と呼ばれた男 (上・下)
2	3学年431小隊 内田 龍平	修養
3	4学年132小隊 國永 光太郎	零戦—その誕生と栄光 の記録
4	3学年121小隊 関屋 翔一郎	幻の自動小銃—64 式 小銃のすべて
5	4学年141小隊 秋島 一弥	戦う者たちへ—日本の 大義と武士

④ 「ビブリオバトル」デモンストレーション

総合情報図書館では3月 10 日、近年読書意識を高揚するために有効として行われている「ビブリオバトル」を防衛大学校でも広めるため、そのデモンストレーションを行いました。

学生隊に4つある大隊からそれぞれ代表者が出て、一人5分間の本の紹介を行い、参加者の投票の結果、第4大隊が最多票を集めて優秀大隊となり、総合情報図書館長から顕彰板を授与されました。

(右写真は優秀大隊の発表者西當優学生(3学年、中央)と武田総合情報図書館長(左))



編集後記

今号では、岡部幹事、河野教官、野村教官から御寄稿を賜り、心より御礼申し上げます。紹介された書籍は、全て図書館に所蔵されています。所蔵図書のリクエスト記号と配架場所は、各記事の末尾に記載されていますので、ぜひ一度手に取ってご覧になってください。

本年度から、新しい意欲的な試みとして、学生自身による図書推薦企画である「防大生の、防大生による、防大生のための1冊」や、学生による知的書評合戦「ビブリオバトル」が開始されました(本号記事参照)。教官による図書の推薦を「縦」糸とすれば、これらの新しい試みが学生同志で読書欲を刺激し合う「横」糸となって、図書館を活用する学生がさらに増加することを願っています。

編集委員長 澤田眞治

NADAL Bulletin Vol.28, No.2

防衛大学校図書館だより 2014. 3. 12

発行及び発行人

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校総合情報図書館 Tel. 046-841-3810

館長 武田 康裕

編集委員

澤田眞治 (安全保障・危機管理教育センター)

入江史郎 (体育学教育室)

多田 毅 (建設環境工学科)

編集庶務

大山 宏和 (総合情報図書館事務室)

連絡先

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校 総合情報図書館事務室

「図書館だより」事務局

Tel. 046-841-3810 FAX. 046-843-3818
